

## 第5章 地域連携・地域貢献・地方創生活動

### 1. 条件不利地域連携インターンシップ

#### (1) インターンシップの概要

インターンシップは、教養ゼミ体験学習と条件不利地域連携特別講座を受講した学生が、より発展的な体験学習をおこなうための教育科目である。今年度は、5名の学生がインターンシップをおこなった。参加した学生は、4年生1名、2年生1名、1年生3名である。今年度の1年生は、体験学習等をおこなっており、他学年に比べてインターンシップを利用して地域に行くことを希望する学生が多い。

インターンシップ先は、東広島市のトムミルクファーム、世羅町の世羅向井農園、愛媛県今治市の越智農園である。研修期間は、夏季休業期間である9月である。各地での研修内容は、表5-2、表5-3、表5-4に示した。

表5-1 平成26年度条件不利地域連携インターンシップ実地状況

学生	年次	インターンシップ先	研修期間
A	4	トムミルクファーム	9/10-9/14
B	2	越智農園	9/10-9/14
C	1	世羅向井農園	9/8-9/12
D	1	世羅向井農園	9/8-9/12
E	1	トムミルクファーム	9/10-9/14

表5-2 トムミルクファームの研修内容

1日目	カップアイスの製造補助・片付け
2日目	搾乳見学・掃除、畑の水遣り、子牛の哺乳補助
3日目	プリン・カップアイスの製造補助、翌日のイベント準備補助、掃除
4日目	搾乳見学・体験、牛の生殖について学習、餌やり見学、子牛の哺乳補助
5日目	イベントでの販売補助

表 5-3 越智農園の研修内容

1日目	ブロッコリーの定植、水遣り
2日目	ブロッコリーの定植、水遣り、畝作り
3日目	ブロッコリーの定植、水遣り、畝作り
4日目	ブロッコリーの定植、水遣り、出荷作業
5日目	水遣り

表 5-4 世羅向井農園の研修内容

1日目	りんごの袋取り
2日目	りんごの袋取り、トマトの袋詰め、トマト拭き
3日目	りんごの袋取り、りんごの収穫・選別、トマトの収穫、トマト拭き
4日目	りんごの袋取り
5日目	ぶどうの収穫、袋詰め

インターンシップに行く学生は、応募動機と体験を通じた感想を報告書としてまとめ、大学に提出している。以下、学生の報告書から 1. 学生の動機、2. 体験を通じて気づいたことについてまとめた。

## (2) インターンシップに応募した学生の動機

学生がインターンシップを希望した動機には、大きく分けて 3 点ある。第 1 に、農業の実態を学びたい、第 2 に体験を通じて自身の成長につなげたい、第 3 に就職を控えて、社会人とは何か、働くとは何か知りたい、である。

「農業の実態を学びたい」では、条件不利地域連携特別講座を受講し、講師が話した内容をより理解するために現地に行って実際に体験し、見聞きたいという学生がいる。また、本学の学生は、農業、畜産業、水産業と関係する内容を学んでいるため、学生の専門分野に関わる実際の作業体系や経営の様子を学び、学問を深めたいという学生もいる。

「体験を通じて自身の成長につなげたい」では、農業現場で働いてみることで自身の視野を広げたい、主体性を身につけるきっかけにしたい、という学生がいた。

「社会人とは何か、働くとは何か学びたい」では、農業現場で働く方のプロフェッショナルな意識や生きがいをもって働く方を通じて、働くことの厳しさや社会的意義、自身の人生観における意義を見い出そうとしている。

## (3) インターンシップを通じて学んだこと

4 泊 5 日のインターンシップで学生が感じたことは、多様であるが主に 4 つの点に集約できる。第 1 に、農業、農作業に関する新たな気づき、第 2 に、地域課題を実感し、認識する、第 3 に、地域のすばらしさを再発見する、第 4 に、今後の学生生活の過ごし方、人生

観の変化、である。

「農業、農作業に関する新たな気づき」では、実際に体験してみて農作業が極めて手間ひまの必要な作業が多いという学生が多かった。また、かなりの体力が必要で、根気や忍耐力が必要であると感じている。加えて、動物による被害や作業が天候に左右されることなど自然を相手に仕事をするこのさまざまなリスクと、それに生産者がどのように対応しているのか、ということを学んでいる。

「地域課題を実感し、認識する」では、実際に地域に行くことで高齢化が実際に進んでいることや後継者不足の現状を実感している。特に、学生が体力と忍耐が必要と感じる作業が多いと感じるなかで、現場では多くの高齢者が作業をしている現状に、日本の農業のあり方に対して問題意識を持っていた。

「地域のすばらしさを再発見する」では、これまで訪れたことのない地域に滞在したことで、これまで知らなかった美しい景観や人の温かさなどを感じ取ったようである。学生の中には、将来訪れた地域の発展に役立ちたいと感じたものもいる。

「今後の学生生活の過ごし方、価値観の変化」では、生産者の知識や技術の深さを知り、これまで自身が学んできたことの知識や経験がまだまだ未熟であったことを感じた学生がいる。また、良質なものを生産し消費者に喜んでもらうために、生産者が生き生きとして、真剣に作業をおこなっている姿を通して、職場探しの価値観を経済性重視から自分らしさや生きがいを重視したいと感じた学生もいる。

短いインターンシップ期間であるが、学生は受入れ先の生産者と交流しながら学内では学べない多くの実体験を得たようである。

## 2. 地域貢献活動

### (1) せらマルシェ・地の拠点コラボ企画

#### 世羅高校×広島大学コラボワークショップの報告

#### ① コラボ企画の経緯

広島県世羅町は、春の体験学習で世羅幸水農園と世羅大豊農園にお世話になり、中山間地域・島しょ部連携特別講座では、せらマルシェの吉宗五十鈴さんが特別講義をして下さるなど、「地の拠点」事業・中山間島しょ領域で大変お世話になっている地域である。

せらマルシェは、2013年に設立された「世羅町で作られた地場産品を町内外に魅力的に発信できるよう定期的にマルシェを開催する」という地域団体である。事務局を担当している吉宗五十鈴さあは、内閣官房地域活性化伝道師である北野尚人さんから「若い人達に世羅の日本一を探す企画をしたらどうか」と提案され、広島大学の学生に検討してもらおうと2014年10月に広島大学「地の拠点」中山間島しょ部領域（生物生産学部）にその企画への協力依頼に来られた。そこで学生から「地元の若い人達にも入ってもらったらどうか」という提案があり、世羅高校生と広島大学生がコラボしてワークショップを行うと

いう企画になった。

## ②世羅高校×広島大学コラボワークショップの開催

2014年12月8日に「世羅の日本一を探そう」コラボワークショップが世羅高校で開催された。世羅高校からは農業経営科に所属する2年生18人の生徒さんが参加して下さった。また、世羅町の物知り博士5人に参加して頂き、広島大学の学生・院生9人がファシリテーターとなって、5つの班に分かれて世羅の日本一をみんなで探した。そこでは、主に次のようなキーワードが抽出された。それは、高校駅伝、チューリップ、唐まんじゅう、ヒヨウモンモドキ（蝶の1種）、松きのこ、メロディ・ロード、ワイン、ナシ、である。

	
ワークショップのようす	インターネットで情報検索
	
世羅高生が調べたことをまとめる	まとめた内容を高校生中心に発表

## ③広島大学生による現地への補足調査

コラボワークショップで抽出された「世羅の日本一」に関するキーワードについて、2015年に開催される「せらマルシェ～あったマルシェ～」で広島大学生が発表することになった。学生たちは「大学生らしくしっかりと調査を行ってその結果をマルシェに集まる皆さんに報告しよう」と話し合った。そこで、世羅町の方々にお願いして、先に挙げたキーワードのうち、①チューリップ、②松きのこ、③ワイン、④ナシについて現地調査をおこな

うこととした。現地調査は、2015年1月9日と1月25日の2回に分けて行い、①世羅高原農場、②世羅きのご園、③せらワイナリー、④世羅大豊農園に訪問して、学生が中心となってそれぞれの代表の方に対する質疑応答を行った。

	
<p>世羅高原農場のチューリップ花絵</p>	<p>吉宗組合長への調査</p>
	
<p>松きこの栽培状況</p>	<p>松なめこの栽培状況（東山会長の説明）</p>
	
<p>せらワイナリーのショップ</p>	<p>行安醸造長への調査</p>



世羅大豊農園



祢宜谷組合長への調査

#### ④せらマルシェでの報告

2015年1月25日、「せらマルシェ～あったマルシェ～」が甲山農村環境改善センターで開催され、3年生を中心に世羅高×広島大学コラボワークショップ「世羅の日本一を探そう」成果を発表した。

今回は、世羅高校生が修学旅行のため、広島大学生のみの成果発表となったが、3年生達は高校生の地元愛を汲みながら、世羅の日本一の根拠は何か、またそれをどのように広めていくべきかについて、作成したスライドに基づいて発表した。彼らはこの発表で「世羅の日本一は、①世羅の強みを生かし、②世羅が大好きな地元の方々が、③地元で協力関係を築きながら、実現されているものばかりでした」と総括した。内閣官房地域活性化伝道師の北野尚人さんからは、「若い人達の熱い思いが伝わった。地域産品は、自分たちの強みをいかにわかり易く伝えるかが大事」とのコメントを頂いた。



地域活性化伝道師・北野さんからコメント



世羅町役場・和泉さんと記念写真

#### ⑤最後に

このような機会を与えて下さった、せらマルシェ、世羅町役場、世羅高校の皆さん、現地調査にご協力いただいた組織・団体の皆さんをはじめ、世羅町の皆さん、本当にありが

とうございました。

## (2) 広島県島しょ部柑橘地帯におけるツーリズム導入による地域再生の可能性を検討 ーツーリズムに活用可能な地域資源についての現地調査ー

### ①背景と目的

中山間地域と島嶼部を抱える広島県は、多様な自然環境のもとで形成されてきた地域資源を活用し、多品目型の農林水産業を展開してきた。

しかしながら近年は、食料供給のグローバル化のもとで広島県の農林水産業は衰退の一途をたどり、中山間地域および島嶼部は、農業部門における条件不利性の拡大、コミュニティの弱体化とともに地域資源の維持が困難な地域・集落が拡大している。

一方、広島県の「海の道」プロジェクトに象徴されるように、風光明媚な瀬戸内圏島嶼部が観光部門における重要な地域資源として見直され始めており、コミュニティの維持・再生の一つの手段として農漁村ツーリズムが検討されつつある。

本演習はこのような状況に鑑み、広島県島嶼部柑橘地帯におけるツーリズム導入による地域再生の可能性を検討するため、ツーリズムに活用可能な地域資源について、現地調査によりそれらの現状と立地状況を確認することを目的とした。

### ②現地調査

現地調査としては、①大崎上島（広島県大崎上島町）、②大崎下島（広島県呉市豊町）、③大三島（愛媛県今治市）、の3島について、それぞれの地域資源、観光資源の確認作業を行った。

これらの状況把握については、大崎上島町役場、NPO 法人かみじまの風、豊町観光協会、呉市豊市民センターおよび広島大学産学・地域連携センターなどの関係機関の多大なる協力によって実施することができた。

### ③大崎上島（おおさきかみじま・広島県大崎上島町）

大崎上島は、柑橘栽培が盛んな島であり、かつては漁業、造船業も盛んであった。

まずは、5月12日に鮎崎港より上陸し、大崎上島町産業観光課、NPO 法人かみじまの風、および広島大学産学・地域連携センターのコーディネートにより、「ネロリ」花摘み体験および船の資料館見学を行った。

「ネロリ」とは、カンキツ類のオイルのことで、大崎上島では、これまで摘蕾で全体の90%ほどは捨てられていたといわれるカンキツの花のつぼみを使って、その花の香りを生かした紅茶を開発した。この紅茶に使う花のつぼみを摘む作業と観光とをマッチングさせたのが、ネロリ花摘み体験である。

当日は、カンキツの無農薬有機栽培を行う中原氏と JA 広島ゆたか常務理事の楠氏の技術

指導のもと、甘夏ミカンのつぼみを摘みとる作業を行った。



甘夏夏ミカンのつぼみ摘み



船の資料館見学

作業終了後、船の資料館の見学を行った。かみじま風の会の角南（すなみ）氏の丁寧な説明のもと、大崎上島が、①歴史的に瀬戸内海の道の重要な結節点・潮待ち港であったこと、②造船業で栄えたこと、③木造船の水漏れを防ぐマキハダという素材を作る技術に長けていたこと、などが紹介された。

17 時からは、学生が 3 組に分かれて民泊家庭と対面し、その後、民泊体験を行った。この事業は 2011 年度から試験的に開始され、2012 年度から本格稼働したものであり、修学旅行の生徒を大崎上島町内の民家が受け入れて、農業や漁業の体験を行ったり、地元の家庭料理を調理体験・食事体験するなどして、主に都会の子供たちに本物の日本を味わってもらおうという取組である。

今回は、金原氏（大崎上島町海藻塾・副塾長）、藤原氏（イチゴ農家）、増本氏（大崎上島町観光協会・会長）に受け入れていただき、当日の夕食から翌日の朝食までお世話になった。民泊は主に中学高校生がターゲットであるため、大学生の受入は初めてであったが、夕食時には深い話まで内容がおよぶなど、充実したコミュニケーションを図ることができた。

また、5 月 14 日には同じく鮎崎港から再上陸し、ミカン農家である峠農園にて農作業体験を行った。主にカンキツの防除、剪定作業を行った。作業後には多品種のかんきつ類について試食会も行われた。





民泊体験の開催式



地元の方とのコミュニケーション

#### ④大崎下島（おおさきしもじま・広島県呉市豊町）

大崎下島は、現在でも広島県の柑橘ブランドである「大長みかん」を生産・出荷する柑橘業の盛んな島である。

5月13日に小長港より上陸し、豊町観光協会の全面的な協力を頂きながら、午前は地域の方々との交流、午後は柑橘ジャムと化粧水の製造体験を行った。

地域の方々との交流は、小長港の近くにある芝生で昼食会という形式で行った。10時30分より昼食会の準備を学生と地元の方と共同で行い、その後、準備ができたのちに昼食会が開催された。大長からは観光協会の大亀氏（会長）とその奥様、末岡氏、そして豊町市民センターの前田氏が参加して下さった。大長ミカンの歴史や9月末に行われる櫓祭り、今後の大学との連携関係などに話がおよび、充実した交流を行うことができた。



柑橘をつかった加工品製造体験

13時からは安芸灘交流館に場所を移し、大亀氏の奥様の指導のもと、清見オレンジのジャム、マーマレード、およびレモン化粧水の製造体験を行った。地元の食材を使った加工品の製造体験ということで、6次産業化の一端を垣間見ることができた。

#### ⑤大三島（おおみしま・愛媛県今治市）

大三島は、平安から鎌倉時代にかけて活躍した村上水軍の拠点となった島である。近代においても漁業が盛んで、瀬戸内海航路が重要な交通幹線であった時期までは、航海の安全を祈念した祭りなどが毎年開催され、大きな賑わいを見せていた。

5月13日の夕方に宮浦港より上陸した。宮浦港から大山祇神社（おおやまづみじんじゃ）までの参道の状況を確認した。石畳と昭和を想わせる町並みが残っており、豊後高田市が

実施している「昭和の町」プロジェクトの援用の可能性がうかがえた。

## ⑥謝辞

本調査航海の実施にあたり、安全かつ円滑な運航をしてくださった中口和光一船長、山口修平首席一等航海士をはじめ豊潮丸乗組員の皆様に厚くお礼申し上げます。

また、大崎上島町・亀山副町長様をはじめ大崎上島町産業観光課の皆様、NPO 法人かみじまの風の皆様、峠農園様、そして広島大学産学・地域連携センター・種丸壽美様には、大変ご多忙中にもかかわらず大崎上島において大変貴重な交流の機会を与えていただきました。そして、大崎下島では豊町観光協会・大亀孝司様、末岡和之様、大亀美保子様、呉市豊市民センター・前田義信様には、ご多忙中にも関わらず、大変丁寧なご対応とご説明をいただきました。本当に感謝いたしております。

ここに挙げた皆様のおかげで、大変有意義な現地研修を行うことができました。記して感謝の意を表したいと存じます。(細野賢治)

## (3) 祭支援と域学連携 — 呉市豊町大町櫓祭りへの参加から —

広島大学大学院 加藤愛

### ①「櫓祭り」の支援を行う背景

瀬戸内海の大崎下島は、かつては日本初の早生ミカン産地として栄え、黄金の島と呼ばれるほど活気ある島であった。しかし、近年は、みかん産業の低迷や農業の担い手の高齢化・後継者不足により厳しい状況に置かれている。高齢化・少子化の影響は、町の伝統行事である櫓祭りの存続を難しくしている。祭りをはじめとする伝統行事は、その地域の歴史や文化を特色づけるだけではなく、地域住民にとって交流の場となり、他出した家族の帰省の機会にもなる。その消滅は、地域の疲弊を加速させることにつながる。

このような状況の打開策として、2013年から、広島大学生物生産学部の学生・院生が、祭りの運営を支援するようになった。参加学生は全員活動には満足し、地域からも高い評価を得た。また、大長地域では交流事業を運営する組織が立ちあがり、域学連携をきっかけとして地域での活動が促進されたといえる。

### ②「櫓祭り」とは

「櫓祭り」とは、毎月9月の最終土曜日に宇津神社前広場を舞台に行われる秋季例祭である。宇津神社は2100年を超える歴史を持ち、櫓祭りは250年前にはすでに行われていた、大長地域の重要な伝統行事である。祭りでは、1.5m四方の題材に7枚の赤い大布団を重ね、

高さ 3m 近い大櫓が練り歩く。櫓の台座上には太鼓を打つ子供、かつぎ棒の上で掛け声をかける 8 人の子供が乗り、総重量は 2t にもおよぶ。しかし、参加者が高齢化した現在は、櫓を担ぐことは負担が大きく、練り歩きを行う時間も年々短くなっている。また、子供がいない分区もあり、櫓の上に乗る子供や踊りをする子供が減少している。住民からは、祭りの華やかさが無くなっていると残念がる声が多く聞かれる。

### ③ 広大生参加のきっかけと反応

2013 年には学生 13 名が参加し、櫓の重さの軽減や賑わい作りに貢献した。外部の人に参加してもらい、祭りの賑わいと存続につなげたいという地域住民の要請を受けてであった。ただ、学生が祭りに参加することに関して、住民間で合意が必ずしも十分ではなかったために、今後も積極的に参加して欲しいという意見と慎重に進めて欲しいという意見があった。

### ④ 継続した祭参加

2014 年 9 月、学生は昨年度と同様に「櫓祭り」に参加し、4 分区が担当する宮出しと昼回しをおこなった。参加したのは、学生 18 人（留学生 2 人含む）、社会人 2 人であった。昨年度から継続して参加した学生が 8 名おり、昨年度交流した地域の方と学生が再会でき双方が喜んでいるようすが見られた。また、参加人数が増えたことで、学生も地域住民もにぎやかになったと評価している。



宮出しのようす



昼回し（小櫓）のようす

### ⑤ 交流事業の拡大と成果

当初は「櫓祭り」の支援が中心であったが、地（知）の拠点整備事業が行う教養ゼミの体験学習を同地区で行うことになった。学生たちは大長みかんの発祥地でみかんの生産・流通について学び、レモンの加工実習をおこなった。

こうした交流事業の成果や課題を確認するために、「櫓祭り」参加者、関係者への聞き取り

調査、アンケート調査を実施し、その調査結果を報告して、今後の地域と大学との連携に関するワークショップをおこなった。参加学生の地域への関心が高まり、継続的に「櫓祭り」を支援する組織や活動ができないかという検討が始まった。また、祭り以外の地域との交流に目が向けられている。

### ⑥地域が得た成果

大長地区での活動を単なる交流事業におわらせず、調査活動もおこなってみた。調査結果を住民に知っていただくなかで、地域活性化の在り方を住民自身が考える機会を作ったのではないと思う。また、学生との交流により、地域の魅力の再発見や、新たな生甲斐の創出、地域の子どもたちが若い学生と触れ合うなど、地域にとってはさまざまな効果があることが認識された。このような場を今後も待ち続けるために、行政・地域・大学との連携の仕方を検討するとともに、域学連携の体制を確立するために何が必要か、考えるきっかけになった。

大長地区の交流事業を行う組織は立ちあがって間もないため、活動のノウハウはまだ十分には蓄積されていない。祭りや交流事業の機会を利用し、地域住民が運営ノウハウを会得することが期待される。交流が活発な地域となることで、「外の人」を受け入れることに慣れ、観光客だけではなく、将来の定住者を受け入れやすい環境づくりにもつながることが期待される。

## 3. 学生・教員による地域課題研究

### (1) 学生による地域課題研究（平成26年度）

#### 卒業論文

#### ◇生月英吾

体験型グリーン・ツーリズムから見た都市の意識と農山村の取り組みのあり方

#### ◇原田紀一

帝釈峡神龍湖の水質悪化の原因究明に関する研究

#### 修士論文

#### ◇加藤愛

条件不利地域における体験型教育旅行民泊受入による効果と中間支援組織の在り方

#### ◇細川富美子

「土壌診断に基づく適正施肥」の現状・課題と展望

— J Aグループ広島の取組を事例として—

## (2) 地域の方から大学に寄せられた提案にもとづく研究活動

### ① 帝釈峡神龍湖の水質悪化原因の究明と改善材適用による改善

(平成25年度 「広島大学地域連携推進事業」プロジェクト)

プロジェクト代表者：生物圏科学研究科 教授 山本 民次

地域提案テーマ：国定公園帝釈峡神龍湖における、水質改善に関する研究

提案者：神石高原町まちづくり推進課未来戦略室



近年、国定公園帝釈峡神龍湖の水質悪化が深刻化している。植物プランクトンの大量発生による透明度の低下や、それによって引き起こされる悪臭は、観光地にとって不都合なものであり、環境を適切に保全・維持する必要がある。

本研究は、帝釈峡の長期水質データの解析と実態調査に加え、数値生態系モデルを作成して、物質循環を定量的に明らかにし、植物プランクトン発生による富栄養化の原因を究明した。

## ②緑黄色野菜わけぎの有効成分の分析と紫化現象発生要因の解明および軽減策の検討

(平成26年度「広島大学地域連携推進事業」プロジェクト)

プロジェクト代表者：生物圏科学研究科 准教授 長岡俊徳  
教授 実岡寛文  
講師 上田晃弘

地域提案テーマ：向島産わけぎの特性解明について

提案者：JA尾道市わけぎ部会



わけぎは、尾道市などで古くから生産されており、地域で馴染の深い緑黄色野菜のひとつである。近年、産地では作付け面積や生産量が減少している。また、晩生わけぎの紫化が、市場において商品価値を下げる原因となっている。

本研究は、わけぎの有効成分や紫化発生機構を明らかにし、わけぎの高付加価値化と安定多収を目指した栽培技術の開発をおこなっている。